

ウイリアム・グリフィスの日本民話集について

—「蛭姫の求婚者」と「雷の子」—

牧 野 陽 子

- 一、はじめに
- 二、グリフィスの『日本の御伽の世界』
- 三、「蛭姫の求婚者」
- 四、「雷の子」
- 五、「雷神の子」の系譜
- 六、棚田の物語

ウイリアム・グリフィスの日本民話集について

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

一、はじめに

歴史ロマンス作品『紅はく』(The Scarlet Pimpernel, 1905-) シリーズや、探偵小説『隅の老人』(The Old Man in the Corner, 1901-) 『レディ・モリーの事件簿』(Lady Molly of Scotland Yard, 1910-) シリーズなどで知られる二十世紀初期の英国の人気作家、バロネス・オルツイ (Baroness Emmuska Orczy, 1865-1947) が初めて出版したのはハンガリーの昔話集『Old Hungarian Fairy Tales』(1895) だった。

ハンガリーの古い男爵家の一人娘として生まれたオルツイは、子供のころに祖国を離れている。反乱にあつて領地を捨てて亡命をした両親とともに、パリなどで過ごし、その後、ロンドンの美術学校を卒業した。まだ無名の若いオルツイは、画家の夫と子供向けの本の翻訳を始め、挿絵も描いた。二人で生活のため矢継ぎ早にだした何冊かの童話集を彩るのは、どれも当時流行したケイト・グリーナウエイ風の優しいタッチの挿画である。だが第一作の題名からうかがわれるのは、失われた祖国と幼年時代への郷愁の念だろう。序文でオルツイは、ハンガリーの子供たちに親しまれたおとぎ話を、手元に残る今や擦り切れた一冊の母国語の古い民話集『Népmesék』(昔話の意)の中からほとんど選んだと述べている。

収められた話は、それぞれ英語の題にハンガリー語の原題が添えられているのだが、八編のうちの一編『The Suitors of the Princess Fire-Fly』(蜜蜂の求婚者)だけ、原題がない。遠くはるかな国の川のなかほど、蓮の花の御殿に住む蜚王の一人娘のお姫さまのもとにさまざまな虫が求婚してくるものの、"炎をもってくるように"との

条件をだされて、みな失敗する、という話である。

本の表紙を飾るのが、蓮の葉の上に立つ美しいフェアリーが掲げる松明のまわりに虫が集まる図だから、「蛍姫の求婚者」はオルツイが特に好きな一編なのだろう。蛍が光を放ち、さまざまな虫が飛び交う夜の世界の幻想性に惹かれたことがわかる表紙絵である。だが面白いのは本文に添えられた挿絵で、どう見ても日本の子供や娘たちの姿が描かれているのである。物語の舞台は、「遠い、遠い国」「蓮の花が咲く遙かな国」であって、日本とはどこにも記されていない。にもかかわらず、灯りを求めて入ってくる黄金虫に驚く子供も、軒先に下げた提灯に集まる虫を鑑賞する娘たちも、日本の髪型と着物になっている。蓮の花のそばでまどろむ蛍姫でさえ表紙とは異なつて、黒髪を結っている。娘たちが菊の鉢植えのある広縁に坐つて提灯を見上げる絵など、そもそも本文には、このような場面がないのも不思議である。

オルツイ以外の手になるハンガリー民話集などを見ても、「蛍姫の求婚者」に似た話は見あたらなないが、それこそではなく、オルツイの話の元は、ウィリアム・グリフィス (William Elliot Griffiths, 1843-1928) の『日本の御伽の世界』(Japanese Fairy World: Stories from the Wonderlore of Japan, 1880, N. Y., James H. Barhyte) のなかの一篇「The Fire-fly's Lovers」だと考えられるからである。粗筋はほぼそのままだがグリフィスからとられていて、娘たちが蛍籠の灯に集まる虫を眺める場面もグリフィスの文章にはある。そして、「The Fire-fly's Lovers」はグリフィスの創作であることを、グリフィス自身がのちに明らかにしているのである。グリフィスのこの日本民話集は一八八〇年にアメリカで出版されたが、その後一八八七年にロンドンでも再刊されているのは、初版がヨーロッパで良く売れたからだろう。F・A・ヨンケル (Ferdinand Adalbert Junker Von Langeegg) によるドイツ語翻案「Princess Glöckchen's

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

Freier" (*Japanische Thee-Geschichten: Fu-so-cha-wu*) が一八八四年にウィーンで、D・ブラウンスによるドイツ語訳 "Der Glühwurm" (*David Brauns, Japanische Märchen und Sagen*) が一八八五年にライプツィヒで出ているので、これらを参照した可能性も否定できないが、どちらも娘たちの蛍鑑賞の場面は省略されているため、オルツイがグリフィスの本を読んだことは確かだろう。

オルツイがなぜ、日本の話を自らの処女作であるハンガリーの民話集に収め、表紙絵にまでしたのか、また日本という舞台を消し、出典も隠しながら、挿絵の内容という第一級の手がかりを "現場" に残したかについては何も語られていないし、またここで問うことでもない。わかるのは、グリフィスの日本民話集が十九世紀末のヨーロッパで子供にも読まれていたこと、そして感性豊かな一人の少女の想像力の世界に強い印象を残したということである。言い換えれば、それほど魅力的な作品が含まれていたことになる。

では、そのグリフィスの日本民話集は、いかなるものなのか。

グリフィスは民話という形のなかで何を語ろうとしたのか。その意味はどこにあるのか。本論では、グリフィスの民話作品の中から「蛍姫の求婚者」と「雷の子」をとりあげて解釈を試みる。

二、グリフィスの『日本の御伽の世界』

グリフィスは、アメリカのフィラデルフィアで生まれ、明治四年（一八七一年）、お雇い外国人として来日し、

福井藩の藩校で一年、その後東京の大学南校（東大の前身）でも化学を教えた。版籍奉還という大きな歴史の転換点をはさんだ四年間の滞在だった。帰国後は、来日前からの予定通り、牧師の道を進み、故郷の教会での仕事の傍ら、『皇国』(The Mikado's Empire 一八七六年)をはじめとして、数多くの日本に関する著書や雑誌記事を著わした。亡くなるまで親日家として知られ、またその著書は長く版を重ねてきた。

日本での最初の日々を東京ではなく、日本海に面した城下町で過ごしたことは、グリフィスの日本体験の根幹をなすことになる。『皇国』には廃藩置県の前後の福井藩の、時代の雰囲気と風景と土地の人々の暮らしが生き生きと描かれている。

そして、中でも印象的なのが神社や寺の描写だということについては、別稿で論じた通りである。当時の大方の外国人と異なつて、グリフィスは、森の木々に囲まれた簡素な神社のたたずまいと、人々の素朴な祈りの形に感動を覚えた。福井赴任途中に立ち寄った神社では、こう思ったという。

「全く清潔で、飾り気のない簡素な本堂」には「偶像も聖像も画像もない。御幣と供物があるのと、白い衣の神主が祈祷しているだけである。強い印象を与える簡素さ、立派に生長した古い昔の木に囲まれた世間から離れた山の上の場所、美、静寂、それらがひとつになって、日本の参拝者同様に、外国の見物人の心にも、崇敬と畏敬の念が浸み込んできた。」(「日本の奥地にて」"In The Heart of Japan")⁽²⁾

つまり、神社の簡素さこそが古びた巨木と響きあつて、深い森の自然の中に静寂と神秘の空間を作り上げているというのであつて、グリフィスは、宣教師でありながら当時の一般的な外国人の宗教的価値観にとらわれずに、日本の宗教、つまり他者の文化を澄んだ眼差しで見ることができた人だということが分かる。

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

グリフィスはいわば、日本の庶民の信仰のありかたを、自然に包まれた神社仏閣のたたずまいのなかに見出したといえるのだが、今ひとつ特筆すべきは、民俗学的関心である。グリフィスは、『皇国』のなかでも章をたてて、諺や子供の遊び、伝説について書いているが、民話への関心は年を経るとともに強まっていった。

グリフィスは、日本の民話集を三度刊行している。(出版社、出版地を変えての再刊はここに数えない。)

最初が一八八〇(明治十二年)、『日本の御伽の世界』(*Japanese Fairy World: Stories from the Wonderlore of Japan*, N. Y., James H. Barhyte)で、三十四編の話が入っている。

次に一九〇八(明治四十二年)、『*The Fire-fly's Lovers, and other fairy tales of old Japan*, (T.Y. Crowell & Co)』二十編所収。

そして一九二三(大正十二年)、『*Japanese Fairy Tales*, (George C. Harapp & Co)』二十八編所収。

三種の民話集の内容は少しずつ異なり、すべてに収められている物語もある。最初の本がアメリカ帰国の数年後に出て、そのさらに二十八年後に二冊目、四十三年後、八十歳のときに三冊目が出されたのであり、グリフィスは民話集執筆の意欲を終生持ち続けたということになる。

周知のように、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけては、欧米において非西洋の民俗や伝承文学への関心が高まった時代であった。いわゆるエキゾチスムの風潮に、グリム兄弟以来の民話への関心があいまって、東洋、南洋の伝説民話集が数多く編まれた。民俗学という新たな学問の登場もこの時代である。

そうした中で、最初に、日本の説話や伝説をとりあげたのは、英国外交官 A・B・ミットフォード (Algenon Bertram Mitford, 1837-1916) の *Tales of Old Japan*, 1871 (明治四年) だった。ミットフォードは幕末から明治初期に

かけて日本に滞在し、帰国後、歌舞伎の出し物や講談などとともに、舌切雀や花咲翁といった昔話も翻訳し、刊行している。赤穂の四十七士の話がここで紹介され、切腹についての考察もあるため、武士道が世界に知られるきっかけとなった。このように、赤穂義士のような歴史の逸話と、舌切雀が一緒なのが面白いところだが、ミッドフォードは、冒頭でまず次のように記している。

The books which have been written of late years about Japan have either been compiled from official records, or have contained the sketchy impressions of passing travellers. Of the inner life of the Japanese the world at large knows but little: their religion, their superstitions, their ways of thought, the hidden springs by which they move. ⁽²⁾

つまり、「日本の宗教、迷信、ものの考え方、行動の源泉」について世界はほとんど知らないと述べて、「それを理解するのに最上の方法が、古くから伝えられた物語の翻訳だと思った」と続けるのである。

そしてグリフィスもまた、『日本の御伽の世界』(Japanese Fairy World: Stories from the Wonder-love of Japan, 1880)の序文にこう記している。

「十二年前に初めて日本の若者と知り合った時以来、私は彼らの民話や炉部の物語に熱心に耳を傾けてきた。」
「四年間の滞在の間に、その豊かな想像力の広がり魅了され」、「日本人の考え、信仰と迷信をよく表している数々の物語の翻訳や要約と著者の短編を一冊にまとめた」のだ。 (“From my first acquaintance, twelve years ago, with Japanese youth, I became an eager listener to their folk lore and fireside stories:…… Within this book the reader will find transla-

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

tions, condensations of whole books, of interminable romances, and a few sketches by the author embodying Japanese ideas, beliefs and superstitions.”³⁾ 又。

グリフィスのいう“Japanese ideas, beliefs and superstitions”はもちろん、ミットフォードの“their religion, their superstitions, their ways of thought”をふまえているのであり、グリフィスの民話集は、民族の心の表れを民話伝説に見るといふ、いわば“時代”の意識を背景に編集されたものともいえる。そしてその意欲のほどは、第一作、『日本の御伽の世界』の全体の構成にもみとれるかと思う。

『日本の御伽の世界』には、三十四篇の話が収められており、第一話が、“The Meeting of the Star Lovers.”(星の恋人たちの逢瀬)とあって、織姫と彦星の伝説である。その後に、「舌切雀」、「猿蟹合戦」、「文福茶釜」、「桃太郎」、「金太郎」、「羽衣伝説」、「京の蛙、大阪の蛙」、「安珍清姫」といった、おなじみの物語や、「七福神」、「鯉の滝登り」、「ナマズと地震」などの民俗学的话题、弁慶や渡辺綱、源頼政の武勇談、また、「うなぎのかぎ賃」のような江戸小話が続く。そして最後、第三十三話と三十四話が“The Creation of Heaven and Earth.”(天地の創造)と“‘How the Sun Goddess was Enraged out of her Cave.’(太陽の女神が洞窟から引き出された話)となつて、『古事記』の神話でしめられている。ずいぶん多彩な内容で、グリフィスが『御伽草子』のほか、講談や落語などからも幅広く物語をとっていることがわかる。

この構成で印象的なのは、最初に七夕、つまり星の伝説を、最後に天照、つまり太陽の伝説を置いていることだろう。七夕は夏の物語だが、天の岩戸の神話は、隠れた太陽が再生し、再び世界を照らすという冬至の物語である。⁵⁾つまり夏の夜の星空に始まり、冬の夜明けの太陽に終わるといふ構成になっていて、この二つの季節の空

の間で、人間と動物たちの愉快で、時に滑稽、時に悲しい物語が展開する。日本人が古来おりなしてきた物語群を通して、一種の世界像のようなものを、この構成で示したのかもしれない。

ただし興味深いのは、この民話集のなかに、グリフィスが（ミットフォードと異なつて）、自作の民話風の短編作品をいくつかさりげなく加えていることなのである。前述したように、三つの民話集の内容は、それぞれ少しずつ異なるのだが、グリフィスの創作民話は一貫して同じものが入っている。そして最初は、どの作品のことか特定せず、ただ「著者による短文 (a few sketches by the author embodying Japanese ideas) をも含む」と控えめに言及していたのが、一九〇八年の第二作の序文では、六つの物語の名をあげて、「これらの物語は日本の書物にはない。みな著者の頭の中で生み出された作品である」(“exist in no Japanese text”, “spun from my own brain”)と、創作であることを強調しているのである。

ここで当然連想されるのが、ラフカディオ・ハーンの再話作品である。たとえば「雪女」や「むじな」は、もともとそのような話が日本にあったわけではなくて、断片的な素材や素朴な伝承にすぎないものにハーンが細かく手を加え、印象的な物語に仕立て上げたものである。つまりハーンは、収集を旨とした民俗学という「採話」ではなく、「再話」を行った。そしてハーンの場合、「再話」は自らの内的世界を投影する、いわば自覚的な文学的営みとなされた。

グリフィスが、一九〇八年版の民話集で、六点が創作であることを強調したのは、ひとつには、先に言及した他の日本民話集に「蛭姫の求婚者」や「雷の子」などグリフィスの作品が日本古来の昔話として断りなく転載されているからでもあり、またハーンが怪談など次々と日本の古い物語の再話作品を発表したことを意識したから⁽⁶⁾

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

でもあるだろう。だがグリフィスは、収集した日本の物語も、自作の新たな民話も、“all of them, I feel sure, reflect the spirit of Old Japan”つまり、あくまでも「日本の昔ながらの精神」を伝えるものだという。第一作の序文で、“a few sketches by the author embodying Japanese ideas”（日本人の考え方を記したスケッチ）だと記したとき以来、編集の目的に揺らぎはないのである。“日本民話集”とタイトルにかかげ、そこにあえて挿入した創作民話には、グリフィス自身が見出した“日本”のイメージが語られていると考えていいだろう。

グリフィスの創作民話はどれも、福井を舞台にした話である。第一作で、“The Fire-fly's Lovers”（蛍姫の求婚者）’、“The Child of the Thunder”（雷の子）’、“Little Silver's Dream of the Shoji”（お銀さんの見た狸々の夢）’、“Lord Cuttle-Fish Gives a Concert”（イカ殿が音楽会を開く）’、“The Procession of Lord Long-Legs”（脚長公の大名行列）の五点、第二作で追加された“The Gift of Gold Lacquer”（黄金の漆の贈り物）を併せて、合計六点ある。

どれも短い話だが、グリフィスがとらえた日本の自然と自然観が表われていて印象深いのが、「蛍姫の求婚者」と、「雷の子」なのである。では、まずは蛍姫の話から。

二、「蛍姫の求婚者」

グリフィスの“The Fire-fly's Lovers”には、オルツイの「蛍姫の求婚者」では省略された部分がある。ひとつは、最後に蛍の王子が現れて結ばれる婚礼の場面であり、もうひとつは、物語の前置きの部分である。

グリフィスは、物語に入る前の冒頭で、日本の蛍狩りの風習の説明から始める。

In Japan, the night-flies emit so brilliant a light and are so beautiful that ladies go out in the evenings and catch the insects for amusement, as may be seen represented on Japanese fans.

They imprison them in tiny cages made of bamboo threads, and hang them up in their rooms or suspend them from the eaves of their houses. At their picnic parties, the people love to sit on August evenings, fan in hand, looking over the lovely landscape, spangled by ten thousand brilliant spots of golden light. Each flash seems like a tiny blaze of harmless lightning.

One of the species of night-flies, the most beautiful of all, is a source of much amusement to the ladies. Hanging the cage of glittering insects on their verandahs, they sit and watch the crowd of winged visitors attracted by the fire-fly's light. What brings them there, and why the fire-fly's parlor is filled with suitors as a queen's court with courtiers, let this love story tell. ⁽⁷⁾ Ibid, p. 37

(日本では、螢の放つ光があまりに鮮やかで美しいため、日本の扇に描かれた情景そのままに、ご婦人がたは夏の夜、螢狩りをして楽しむ。

人々は、捕えた虫を細い竹ひごを編んだ小さな竹籠に入れて、家の室内または軒先につるす。そして夏の夜、人々は団扇を手の外に出かけ、何千何万という螢の黄金の光がきらめく、美しい田園の景色を眺めて過すことを好むのである。光が点滅するさまは、まるで小さな稲妻の閃光のようである。

夜の螢のなかでも最も美しい一種は、女たちに、大きな愉しみをもたらしてくれる。さらさら輝くその昆虫の籠を緑

ウイリアム・グリフィスの日本民話集について

先につるすと、さまざまな夏の虫が、蛍籠の光に吸い寄せられるように、集まってくる。女たちは広縁にすわって、それを眺める。なぜ虫たちが集まってくるのか、なぜ蛍の客間に求婚者があふれるのか、そのわけは、この物語が語ってくれる。(

グリフィスは物語に入る前に、このように述べて、夏の風物詩としての蛍というものを最初に提示する。はじめに言及したオルツイの挿絵は、この箇所を描いたものだったが、グリフィスは物語の背景にある文化、習俗、行事など、人々の暮らしとのかかわりを簡潔に述べるわけで、他の昔話でも、たとえば、「牽牛織女の物語」では最初に七夕祭のことを、「雷の子」では棚田の開墾、「二匹の蛙の小話」では、京都と大阪の町の違いについての説明がある。このような前置きによる物語の枠組みは、グリフィス民話の特徴といえるかもしれない。⁽⁸⁾たとえば、ハーンは、「雪女」でも、「耳なし芳一」でも、直接物語世界に入っていくことが多い。そのため、ハーン、特に怪談などは、現実を超えた不思議な空間を作るのだが、グリフィスは、人々の日常の暮らしの伝統の上に根差した物語であることに重きを置いていけると言える。

ところで、ハーンは夏の蝉の声や秋の虫の音、鈴虫などを籠で飼う日本の習慣について書いていて（日本の庭にて）、「蛍」という題の随筆もある。ここでは、蛍の採り方や蛍にまつわる故事などをあげていくのだが、印象的なのは、宇治川の蛍合戦の記述である。ハーンは、源氏蛍と平家蛍などの名は、死んだ双方の侍の亡霊が蛍となって出てくるからなのだと述べる。そして松江の、ある侍の家に飛んできた蛍が、実は彼を慕う娘が夢のなかで蛍になったものだったという話も記している。つまりハーンにとって、蛍の魅力は夜の暗闇に浮かび上がり

揺らめく光の幻想性と同時に、どこか不気味な怪奇性にあった。蛍に人の靈魂のイメージが重なり、ハーンの作品に登場する蛍は、死者の亡霊であったり、体から抜け出した生霊だったりした。そしてそれはまた、たしかに日本の蛍の伝承イメージのひとつの側面でもある。

それをふまえてグリフィスの「蛍姫の求婚者」を読むと、およそ印象が異なる。夜の幻想性は同じなのに、また虫たちが次々と哀れな死を遂げるのに、ここには、「生」の華やぎと里の自然の豊かさが感じられるのである。先ほどの前置きを受けて、蛍姫の物語はこう始まる。

On the southern and sunny side of the castle moats of the Fukui castle, in Echizen, the water had long ago become shallow so that lotus lilies grew luxuriantly. Deep in the heart of one of the great flowers whose petals were as pink as the lining of a sea-shell, lived the King of the Fire-flies, Hi-o, whose only daughter was the lovely princess Hotaru-hime. While still a child the hime (princess) was carefully kept at home within the pink petals of the lily, never going even to the edges except to see her father fly off on his journey. Dutifully she waited until of age, when the fire glowed in her own body, and shone, beautifully illuminating the lotus, until its light at night was like a lamp within a globe of coral.

(越前の国、福井城の南側の日当たりのよいお濠では、水も浅くなって久しく、蓮の花が見事に咲き誇っていた。大きな蓮の花の奥深く、貝殻の内面のような淡紅色の花びらに包まれて、蛍の王、「火王」の住まいがあり、一人娘の美しい蛍姫が暮らしていた。蛍姫が子どものうちは、蓮の桃色の花びらの中で大切に匿われて、父が仕事で飛び立つのを見送

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

ウイリアム・グリフィスの日本民話集について

る時以外、外はおろか、花びらの端にさえ出なかつた。だが、年ごろになると、身体のなかに火が灯り、輝きを放って、蓮の花を美しく照らした。夜になると、花は珊瑚でできた球形のランプのごとく光った。）

舞台は、福井の城の南側の濠である。濠の水位が低いのは、深い濠の水は必要なくなつた、つまり平和が長く続いている、ということだろう。争い事のない、穏やかな世界で、日当たりのよい城のお堀には、楽園に咲くという蓮の花が咲き誇っている。花は、中に棲む蛍の光を映して、丸いぼんぼりのように水面から立ち上がり、その花びらの色も、まるで小さなヴェーナスを生んだ海の貝の真珠層のようだという。

グリフィスの語りは巧みで、前置きの広いパースペクティブによる人々の田園生活の蛍狩りの様子から、城の堀へと寄っていく、さらに蓮の花にクローズアップして近づいて、そこで展開される虫たちの小世界のファンタジーに読者を導き入れる。

さて、話はこう続く。蛍姫の美しさは日に日に輝きを増すようになり、蓮の花の外へ出ることが許される。

“*Hotaru-hime flew forth in and out among the lotus lilies of the moat, then into rich rice fields, and at last far off to the indigo meadows.*”（蛍姫は濠の中、蓮の花々の間をめぐり、ついで立派な田圃の中へ、さらには遠く藍色に染まる野原へと飛んでいった。）若い娘が次第に行動範囲を広げ、濠の外へ、豊かに実りつつある稲田を通りぬけ、時にははるかな藍色の田圃のなかに消え入ることもある。薄紅色から一面の黄色、ついで藍色へと推移する色のイメージも鮮やかである。

そして、多くの虫たちが蛍姫の美しさに惹かれて、寄ってくる。すると、蛍姫は、押し寄せる求婚者たちに糸

件を出す。“Bring me fire and I will be your bride”「火をもってきてくれたら、結婚を承諾しましょう」と。そこで、黄金虫 (the golden beetle)、黒光りする虫 (a shining bug)、赤とんぼ (the dragon-fly)、カブト虫 (the Beetle)、すずめ蛾 (the brilliant hawk-moth)、衣虫 (clothes moth) 等々、様々な昆虫が登場しては、火を求めて冒険に出かけ、みな悲しい死を遂げる。灯りがもれる障子にぶつかると、ランプの油で溺れるもの、ろうそくの炎で焼け死ぬもの、ろうそくの芯を登って、潰されるもの。翌朝、行燈のまわりは死骸の山となる。“The Princess Hotaru must have had many lovers last night.”「昨夜は、ずいぶん沢山、蛍姫に恋こがれたようだね」と人々はつぶやきながら、後片付けをする。猫の眼の緑色の先に突進するものや腐木の燐光にあざむかれるものもある。

最後に城の北側の濠に棲む虫の王子が、姫の評判を聞きつけて、松明をかけた光の隊列とともに現れ、あふれる輝きの中で二人はめでたく結婚する。夏の夜は、今なお虫たちが火に飛び入る。娘たちが蛍を籠でかうのも、虫の恋の情熱にあこがれるからなのだ、とグリフィスは最後に結ぶ。

物語は、いわゆる“難題求婚譚”の話をふまえていて、夜、光り輝く蛍姫の姿は、かぐや姫の話にヒントをえたのかもしれない。ただし、かぐや姫と違って、最後はハッピーエンドでおさまるべき所におさまる。蓮の花の中の小さな姫は、どこかアンデルセンの“親指姫”を思わせ、女王のセリフや、黄金虫の“making obeisance”、つまり騎士の優雅なお辞儀の仕方など、中世の宮廷をイメージさせる表現もちらりばめられている。

そして、この物語でやはり愉快なのは、タイトル通り、蛍姫のもとにくる虫たちが生きいきしていることだろう。求婚のさまも、冒険の行方も、それぞれの虫の生息、個性が良くでている。たとえば、伊達男の黄金虫、無骨なかぶと虫、容貌自慢の赤とんぼ、がさつな蛾、……。ここには虫たちの小世界の面白さと、多種多様な昆虫

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

が生彩を放つ、豊かな自然が描かれているのである。

ちなみに、多種多様な生き物がまるで集団劇のように登場するのは、「イカの音楽会」の話、「虫の大名行列」の話も同じである。それぞれ、話の筋といえるほどの筋もなく、ひたすら海の生き物、野の虫をつぎつぎと列挙して、その仕草や容貌を描いていく。海の宮殿の宴と音楽の合奏の様子、バッタの大名の参勤交代で大騒ぎの参加者と見物人の様子、二つのスケッチは、どこか鳥獣戯画や北斎漫画を思わせる。それでも、戯画やパロディといえるほどの辛辣さはなく、もっぱら、多勢の生き物に出番を与えることが主眼の、生き物図鑑のようなスケッチになっている。

蛍姫の物語は、日本の夏の風物誌に始まり、幸せな婚礼で終わる。グリフィスが描こうとしたのは、人里近い自然を彩る命の華やぎと、その小宇宙を包む平和な人々の暮らしだといっていいたいだろう。そこには、福井到着間もない頃のグリフィスの驚きと喜びにみちた眼差しが感じられるのである。

ただ「蛍姫」では、前述したような西洋の「妖精」のイメージが重ねられ、しかも背後に夜が広がる。虫たち一匹二匹の悲喜劇も、ふと速水御舟の「炎舞」の宿命を想起させる。脳裏をよぎる、このような幻想的な妖しさが、あるいは、グリフィスの意図をこえて、世紀末のオルツイの心をとらえ、前書きと結末を削除させたのかもしれない。

一方「雷の子」は、グリフィスの眼差しが初期の風物観察の段階からさらに深まり、日本における自然と人間の関係のあり方そのものをとらえようとした作品だといえる。

四、「雷の子」

“The Child of the Thunder”⁽⁹⁾ は、貧しいが働き者の百姓が、雷さまの子供を授かる。するとその田圃だけは水不足にならず、豊かになるが、ある日、子供は龍となって空に戻る、という話である。

物語は、導入、出来事、後日談の三段構成になっていて、こう始まる。

In among the hills of Echizen, within sight of the snowy mountain called Hakuzan, lived a farmer named Bimbo. He was very poor, but frugal and industrious. He was very fond of children though he had none himself. But being so dreadfully poor both thought it best not to adopt, until they had bettered their condition and increased the area of their land. For all the property Bimbo owned was the earth in a little gully, which he himself was reclaiming.

雪におおわれた白山が見える越前の山あいには、貧しいが働き者の百姓が住んでいた。子供好きだったのに、子供はいなかった。あまりに貧しく、暮らし向きがよくなるまでは、と違って養子をとる余裕もなかった。百姓の家には、開墾中の、小さな狭い谷間の僅かな土地しかなかったからだ。

A tiny rivulet, flowing from a spring in the crevice of the rocks above, after trickling over the boulders, rolled down the gully to join a brook in the larger valley below.

ウイリアム・グリフィスの日本民話集について

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

山上の岩の裂け目から湧き出た小さな水の流れが、岩場をつたい、谷をころがり落ちて、下の小川に合流した。

百姓は何年も苦勞して水をせき止め、石を積んで、その中に山から土を運んでくれた。下の谷からも、夫婦し籠を背負って土を運んだ。そしてようやく小さな田圃ができた。

The little rivulet supplied the needful water; for rice, the daily food of laborer and farmer, must be planted and cultivated in soft mud under water. So the little rivulet, which once leaped over the rock and cut its way singing to the valley, now spread itself quietly over each terrace, making more than a dozen descents before it reached the fields below.

すると、小さなせせらぎが必要な水を与えてくれた。というのも、庶民が毎日食べるお米は、水の下の柔らかな泥土に植え付けなければならないからである。かつては岩の上を飛び跳ね、歌いながら谷間へと流れおちていった小さなせせらぎは、今や静かにすべての棚田の上に広がり、何度もゆっくり段差を降りながら、下の平野へと下っていったのである。

この冒頭部分で、グリフィスは棚田の形成の話をする。百姓夫婦が土をいれた重い籠を背負い、急斜面を登り、何年もかけて谷間の土地を開墾する大変な苦勞がわかる。そして印象的なのは、百姓側の農作業の話と呼応する

ように交互に語られる、小川の動きの方の描写だろう。水の流れはここで生き物のように、人格をもっているかのごとく描かれている。A tiny rivulet を主語として、*flowing*、*trickling*、*rolled*、*join* と動詞を重ねて、小さなせせらぎが湧き出て流れ落ちていく動きが示され、百姓の苦勞に応えるかのように、*“The little rivulet supplied the needful water”*、必要な水を与えてくれたという。そして棚田が完成すると、かつては子供のようにはしゃぎながら、自由自在に岩場を飛び跳ねて流れ落ちていた水が、*“now spread itself quietly over each terrace, making more than a dozen descents before it reached the fields below.”* 今や静かに棚田の一段一段に広がり、ゆっくりと下の川へと流れていき、合流する。まるで元気な子供が、すっかり落ち着いて大人になっていくかのような描写で、米作りの風景のなかにおける水の誕生と成長と成熟が、詩的なイメージで示されるのである。

物語はこう展開する。

ある夏の日、日照りが続いて稲も枯れそうになった時、雲がもくもくと沸き起こって、夕立になった。稲妻の閃光が走り、雷の音が山々に響いた。だが、百姓は雨降りが嬉しくて、冷たい雨粒が頬に心地良くて、鋤をもったまま、仕事を続けた。棚田があふれる水に流されないよう、囲いの石を補強したのである。

雷雨の勢いは増した。雷神が嵐ののつて空を駆け、時に恐ろしい雷獣を雲間から投じて人の命を奪うと聞いていた百姓は、鋤を肩にかけて他へ移動しようとしたとき、恐ろしい光に目がくらみ、耳をつんざく音がして、目の前に雷が落ちた。すると、

“There lay a little boy, rosy and warm, and crowing in the most lively manner, and never minding the rain in the least.” ふと見ると、足元に丸々として血色の好い、小さな男の子が雨も気にせず、元気にはしゃいでいた。百

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

姓はびっくりする。しかし大変喜んで、子供を抱き上げ、家に連れ帰った。

“Here's a gift from Raijin.” “We'll adopt him as our own son and call him Rai-taro.” 百姓は、雷神さまからの贈り物だといって、雷太郎と名付けて養子にする。

男の子は親の言うことをよく聞く優しい良い子に育った。ただ、他の子供たちとは遊ぶことはなかった。“He never liked to play with other children, but kept all day in the fields with his father, sporting with the rivulet and looking at the clouds and sky.” いつも、父親と一緒に畑にいて、小川と戯れ、空と雲を眺めていた。

大神楽がやってきて、祭りで村がにぎわった時も、“the child of the thunder stayed up in the field, or climbed on the high rocks to watch the sailing of the birds and the flowing of the water and the river far away.” 雷の子だけは畑にいるか、大きな岩に上って、空ゆく鳥と、流れる水と、はるかな川を眺めていた。

百姓の家は裕福になった。不思議なことに、よそでは全く雨が降らないときでも、雷太郎の田圃にだけは雨が降ったのである。そして百姓は、すべては雲から落ちてきたかわいい子ども御蔭だ、雷太郎が雲に呼びかけて雨を降らすのだと信じた。

夏がいくたびもめぐり、雷太郎は背の高い、麗しい青年に育った。成人となる誕生日に、ささやかな祝いをして、雷太郎の生まれた日のことをみな思い出した。すると、青年は神秘的な面持ちで、

“My dear parents, I thank you very much for your kindness to me, but I must now say farewell. I hope you will always be happy.”と、両親への感謝の言葉を述べて、別れを告げる。

Then, in a moment, all trace of a human form disappeared, and floating in the air, they saw a tiny white dragon, which hovered for a moment above them, and then flew away. The old couple went out of doors to watch it, when it grew bigger and bigger, taking its course to the hills above, where the piled-up white clouds, which form on a summer's afternoon, seemed built up like towers and castles of silver. Towards one of these the dragon moved, until, as they watched his form, now grown to a mighty size, it disappeared from view.

すると、見る見るうちに人間の形が消え、小さな白い龍と化して、両親の頭上にはし浮かんだかと思つと、飛び去つた。老夫婦が外にでて目で後を追うと、龍はどんどん大きく遅しくなつて、山の方へ向かつていく。そして、二人が見守るなか、銀色に輝く城の塔のような夏の午後の入道雲の中へと消えいった。

こうして雷の子は、空に戻つた。その後、白髪の老夫婦は穏やかに豊かな余生を送り、亡くなると、村の火葬場の炉でひとやまの白い遺骨となつた。夫婦の遺灰はひとつの骨壺に収められ、お寺に埋葬された。墓石は白い龍の形に彫られて、それは苔むした今もなお、小さな村の墓地にある。

僅か三頁ほどの短編だが、素朴な味わいが心に残る作品といえる。グリフィスは「雷の子」は創作であると断つていて、たしかに、北陸の昔話集（たとえば杉原丈夫編『越前若狭の伝説』、『若狭・越前の民話』）などをみても、同じ話はない。だが、それを知らなければ、元々日本にある話そのままだと思つてはいないか。

ここで留意すべきは、「雷の子」が何の違和感もなく読めて、いかにも日本の民話らしい話になっているのは、

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

グリフィスの民俗学的知識が土台にあるからだということである。

では、「雷の子」がどういふ民話的伝統の上になりたつのか、まず確認しよう。

五、「雷神の子」の系譜

グリフィスの作品は昔話の型としては、いわゆる「申し子」の物語であり、また古くからの雷神信仰をベースにした物語だということが指摘できる。

「申し子」譚とは、子供のいない老夫婦が、神仏の計らいによつて子宝を授かり、その子が富をもたしたり、冒険にでたりするという、昔話に多い形で、たとえば桃太郎、一寸法師、竜宮童子などがその代表として知られる。

雷太郎は冒険には出ないが、水と豊作をもたらす。そして雷神が遣わした少年は、他の子供たちとは行動せず、いつも一人、小川や田圃から空の雲を眺めていた。月をみては物思いにふける、かぐや姫と同じように、それは天から地上に降り立った子の、やがて天に戻るべき運命を暗示する姿なのである。

いうまでもなく、天から閃光を放つ雷を神とする信仰は古く、また雷は雨を伴うことから雷神は古くから水神の属性をもった。そして稲妻、稲光という言葉にみられるように、農耕の神、豊作の神と信じられてきた。各地に残る雷神信仰や雷神講は雨乞いや豊作祈願と関連したものが多く、

「雷さまにまつわる昔話も数多く、『日本昔話通観』などをみると、全国的に分布しているのは、「雷の夕立」

(太陽、月、雷が旅行して雷は寝坊したため、置いていかれて夕立になり、「月日がたつのは早い」と言ったという話)のよ
うな笑い話のほか、「源五郎の天昇り」という、男が豆の種を播くと、天まで届く大木になり、それを登って
天に行く。雷さまに会い、雨を降らせる手伝いをするが、あるとき雲を踏み外して落ちる、という、「ジャック
と豆の木」に似た話である⁽¹⁰⁾。

一方で、これもまた周知のように、海や川、池などの水中にすみ、雨や水をつかさどるのが龍と大蛇であり、や
はり水の神であるため、両者のイメージが結びついて、雷神、ないし雷神の申し子は龍の姿をとったり、頭に蛇
をまとった子供の姿で現れるということにもなった。

柳田国男は、雷神信仰に注目して、「小さ子」、「神の子」説話との関連で繰り返し取り上げている⁽¹¹⁾。グリフィ
スの作品「雷の子」では、先にみたように、前置きと後日談を除いた物語の核は、「雷神が子を与えた」、そして
「その子が田圃に水をもたらした」、という点にあるといえるのだが、まさにその二点を軸に、雷神に関わる物
語の系譜を論じたのが、柳田国男「雷神信仰の変遷」(「妹の力」所収)⁽¹²⁾である。

ここで柳田は「神子誕生の物語に往々にして雷神が関わる」例として、三つの物語を挙げている。

- 1、奈良元興寺ゆかりの道場法師の話。
- 2、大和斑鳩の龍田の地名説話。
- 3、越後國上山の神泉由来譚。

ウイリアム・グリフィスの日本民話集について

まず道場法師とは、尾張出身の飛鳥時代の僧で、その逸話が仏教説話集『日本靈異記』（僧景戒著、弘仁十三（八一）年に成立）の上巻第三話「雷の意を得て生ませし子の強き力在る縁」である。こゝう始まる。

昔敏達天皇の御世、尾張の国阿育知の郡片纏の里に一りの農夫有り。田を作り水を引く時に、小細雨降る。故に、木の本に隠れ、金の杖を植きて立つ。時に雷鳴る。即ち恐り驚き金の杖をささげて立つ。即ち雷彼の人の前に墮ちて、小子と成りて随ひ伏す。其の人、金の杖を持ちて撞かむとする時に、雷の言はく「我を害ふこと莫かれ。我汝の恩に報いむ」と。其の人問ひて言はく「汝何をか報いむ」といふ。雷答へて言はく「汝に寄りて子を胎ましめて報いむ。故に、我が為に楠の船を作り水を入れ、竹の葉を泛べて賜へ」と。即ち雷の言ひしが如く作り備へて与へつ。時に雷言はく「近く依ること莫かれ」と、遠く避けしむ。即ち、鬚り霧ひて天に登る。然して後に産まれし児の頭に蛇を纏ふこと二遍、首と尾とを後に垂れて生まる。

つまり、農夫が「田を作り水を引く時」、雨が降り、木の下で雨宿りすると、「小子」姿の雷が落ちてきた。鋤（金杖）で撃とうとしたら、子供をさずけるから助けてくれと言う。雷のために楠の船を作り、空に返すと、やがて、頭に蛇をまとった子がうまれたという。

この子どもが大変な力持ちで、力比べをすれば勝ち、元興寺の童子となつて鐘樓堂にすむ人食い鬼をも退治した。そして周辺の有力者による引水妨害を排除し、元興寺が所有する田に水を引く。童子は出家して道場法師となり、その水は、今も喝れることがない、「後の世の人の伝へて謂はく、元興寺の道場法師、強き力多有りとい

ふは、是れなり。」と終わる。

靈異記の道場法師の説話は、雷神が田に水をもたらす話であると同時に、元興寺縁起ともなっている。ところで興味深いのは、冒頭の、農夫が落ちてきた雷を捕まえるという部分に関して、中国の説話・伝承との類似が指摘されてきたことである。なかでも影響を受けたとされる文献の代表が『搜神記』（東晋の政治家・文人、干宝（？—三三六年）が著した志怪小説集）にある「雷神をつかまえる話」（卷十二、三〇五話）である。短いもので全文を引く。

晋のころ、扶風（陝西省）の楊道和が、ある夏の日畑仕事をしていて雨にあい、桑の木の下に入ったら、雷神が落ちかかって来た。そこで、道和は鋤を得物に格闘し、雷神の股を叩き折った。そのため雷神は、地に落ちたまま逃げられなくなってしまった。その唇は朱のように真っ赤で、目は鏡のように光り、長さ三尺の毛の生えた角があり、体は牛や馬のようだが、首は猿に似ていた。⁽¹⁵⁾

中国の雷神説話を詳細に調査分析した、ある研究では、「雷と人とが対決し、人間が金属器などの道具、武器を用いて雷神を傷つけ捕獲制圧するという話」は、「中国の伝承世界において類型的に存在するモチーフ」であり、『靈異記』上三縁の雷神捕獲の説話が、これらの中国の伝承が有するモチーフの移入によって形成されたものであることは間違いないであろう。（河野喜美子『日本靈異記と中国の伝承』⁽¹⁶⁾）という。たしかに、農夫が鋤を手畑仕事をしているとき、雨が降り、雷神が落ちてくる、その雷神を捕まえるという状況は道場法師の話とも、

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

さらにいえばグリフィスの「雷の子」とも似ている。だが大きな違いは、『搜神記』では、雷神を鋤で叩き折り、雷神は逃げられなくなるといことだろう。一方、道場法師は鋤を手に身構えるものの、助けてくれと言われ、雷神を天に返す。柳田のいう、「日本の風土が自然に育成したところの、雷を恐れて之を神の子と仰ぎ崇めた信仰」⁽¹⁷⁾の上になりたつ道場法師説話では、「捕獲制圧」譚の色合いは希薄なのである。⁽¹⁸⁾

『日本霊異記』の道場法師の伝説では、雷をとらえた話と、田圃に水を得た話との間に、童子の冒険譚や力比べの話が入っていて、直接は繋がらない。それが、間の武勇談が省かれ、直接結びついたのが、のちの大和龍田の地名説話であり、『今昔物語集』の越後の神融聖人の話だと柳田はいう。

龍田は、大和の斑鳩^{いかるが}の地名で、竜田神社は風の神、農耕の守護神として知られる。⁽¹⁹⁾そして、地名の由来は、こう伝えられている。

昔ここに雷神がこの地に落ちて童子となったのを農夫が子として養った。ある夏の初め、よそは早魃だったが、この農夫の田には雨が降って稲がよく実った。そののち、この童子が暇乞いして小竜⁽²⁰⁾となって天に昇ったので、その田を竜田といったのがやがて地名となった。

きわめてシンプルで素朴な伝承で、グリフィスの「雷の子」の粗筋とはほぼ同じである。これが原話かと思えるほど似た話といえる。

ところが、グリフィスとの関連でさらに興味深いのは、柳田があげる三つ目の説話が、福井の泰澄法師のもの

だということなのである。

奈良時代の僧、泰澄（六八二―七六七）は、越前国麻生津（福井市南部）に生まれ、越の大徳また神融禪師とも呼ばれた。越前の越知山で修行の後、修験者として各地をまわり、養老元年（七一九）に白山を開山したことで知られる。白山に登ると夢に菩薩が現れたという神秘体験にまつわる話や、泰澄ゆかりの各地の古寺と泰澄作と伝えられる近江の渡岸寺の国宝十一面観音像などについては、近年では司馬遼太郎（『街道をゆく』18 越前の諸道）や白洲正子（『かくれ里』『近江山河抄』）も紀行文でしばしば言及している。

この泰澄に、雷を捕らえたという伝承があつて、『今昔物語集』（作者不明、平安末期成立）に記されている。第十二巻第一話「越後國の神融聖人雷を縛りて塔をたてたる語」で、「今は昔、越後國に聖人有けり。名をば神融と云ふ。世に古志の小大徳と云ふは此れ也。」と始まる。以下、粗筋をのべる。

古志の國の國上山に、ある有徳の人物が塔を建てようとしていた。しかし建て終つて供養を行おうとする時、「俄に雷電霹靂して、此の塔を蹴壞て、雷空に昇ぬ」、つまり、にわかに雷が落ちて塔は破壊されてしまった。願主は自然現象であるとあきらめ、ふたたび塔を建てた。しかし供養の日、またもや塔は雷によつて壊されてしまった。三度目の塔を建てたとき、神融聖人が訪れて法華經の力で雷を防いでさしあげようと申し出た。

聖人が塔の下で法華經を誦していると、一天にわかにかき曇り雷電がとどろいた。三度塔が破られるかと願主たちが逃げまどうなか、空から少年がひとり墮ちてくるのが見えた。年の頃十五、六歳。頭髮は蓬のごとくきわめて恐ろしい姿である。しかしかれの五体はきつく縛られており、泣く泣く聖人に許しを請うのだった。聖人が、なぜ塔をたてる邪魔をするのだ、と聞くと、「此の山の地主の神、我れと深き契り有り。地主の神の云く、

我が上に塔を起つ。我れ住む所無かるべし。此の塔を壊るべし」という。つまり、雷神は國上山の地主神の友だつた。住処すまかを失うことをおそれた地主神に頼まれ、塔を破壊したというのである。しかし聖人の法力に屈した雷神は仏法に従うことを誓い、さらに、水の便がなくて不自由だった寺に水を引くことを約束せられる。雷は巖の上を挿んで、空に飛び立ち、そのとき、巖から清らかな水が湧きでて、池となった。その後数百年を経ても塔は無事であり、この山寺の水が絶えることはない。まさに法華経の力である、と『今昔物語集』は結ぶ。

これらの雷神説話に関しては、柳田国男以降、民俗学・国文学・古代史ほかの専門家による研究が数多くなされているが、門外漢にも理解できるのは、これらの説話に、農耕という場における、水を介した人間と自然の関係がみえるということである。古代における治水事業、水をどう入手し、支配するかという問題が投影されているのかもしれない。

中国の民間伝承では、雷神は人間に対立する自然神であり、武力によって制圧される。鋤は雷と戦う道具であつて、話は単純明快な雷神制圧譚になつてゐる。だが柳田があげる日本の雷神の話では、いったん雷神をつかまえても、助けて放ち、代わりに力をさずけてもらう。道場法師説話の鋤などは、むしろ雷神を呼ぶ依代となつてゐる。自然観の相違の表われといつていいだろう。

そしてまた、道場法師、泰澄大師の物語では、仏教と土着の神々、つまり神道との関係が語られていることもわかる。雷さまが寺の僧侶に従うわけで、「説話における神仏習合」(黒沢幸三「靈異記の道場法師系説話について」⁽²²⁾)だと指摘されているが、それが特にはつきりとあらわれているのが泰澄大師の話である。話のなかで、泰澄は仏法によつて、國上山の神も、その友だつという雷神、水の神も支配下においた。泰澄寺の境内にある池は、泰澄が

座禪修行中に落ちてきた雷を封じ込めて湧き出たという泉である。そして、白山「開山」というのも、つまりは古代の靈山、土地の山岳信仰の「仏教化」に他ならないことは、周知のとおりである。

六、棚田の物語

では、これらの雷神説話をふまえて、もう一度、グリフィスの作品『The Child of Thunder』をみてみよう。グリフィスは、どのように「雷の子」を構想したのだろうか。

グリフィスは、日記によれば、ほぼ毎日散歩に出て、近隣の神社仏閣を訪ね、お祭りも見学し、またお寺の僧侶たちとの行き来もあった。時には馬で遠出をした。そして、遠くに望む白山の景色を愛し、夏には白山に登っている。泰澄の生地に建立された泰澄寺はグリフィスが住んだ足羽から行けない距離ではない。泰澄寺の奥には白山権現社があり、境内には、泰澄が雷を封じこめた雷之池もある。学生たちの「炬部の物語」に好んで耳を傾けたグリフィスならば、土地の人から、泰澄の伝説や白山開山の話、福井平野を流れる九頭竜川のいわれなどを聞きだしていたかもしれない。白山登山の折には、その登り口に泰澄が開いたという勝山の平泉寺白山神社にも立ち寄っただろう。一方で、グリフィスには地名の由来への関心もあったから、龍田の語源を聞き知っていたとも考えられるだろう。

では、グリフィスは、雷の子が田圃に水をもたらすという粗筋は龍田の説話から拝借して、舞台だけ白山を望む越前の地に変更した、ということなのだろうか。だが前述したように、グリフィスは、「日本古来の精神」が

こめられた「雷の子」が自分の創作だと明言している。だとしたら、グリフィスの「雷の子」の独自性はどこにあるのか。

先に、グリフィスの民話語りの特徴として、前置きと後書きがあることを述べた。“The Child of Thunder”では、そこにグリフィスの創意と、グリフィスの考える「日本の心」を読むことができるのではないか。中核の雷の子の物語を、いわばグリフィスの解釈で包み込んでいくことになるわけで、それは、第一に、冒頭部分における棚田の描写に、第二に、結びの場面の後日談にみることができると思う。

籠田の地名伝承において、舞台は平地にある田圃である。だが、グリフィスは物語の舞台を、白山をのぞむ、越前の山間の谷の棚田に設定した。棚田という場合は、おそらくは他のどの雷神譚にもみられないのではないか。

白山は、夏でも頂上に雪をいただき、白山信仰の霊山であることを納得させる、神々しい美しさである。「グリフィス日記」のなかの、田圃の描写にはしばしば遙かな白山の姿があり、グリフィスが山の神秘を日々の散歩の折にも感じる人だったことがわかる。

だが「雷の子」では、白山はただ風景の一部としてあるのではない。冒頭の描写で印象的なのは、山から田圃への水の流れの描き方だと、先に言った。湧水のしずくが一筋のせせらぎとなり、岩場をつたい、流れ落ちて、やがて静かに棚田の一段一段を満たすに至る。谷間のかあなたに雪におおわれた白山の峰がそびえるからこそ、その水が天の恵みであることを、神々の世界から人間界へ下ってくることを実感するのである。言い換えれば、白山は水の霊性を象徴する存在に他ならない。そして、そのような神々の世界から遣わされた雷太郎が、田にたたずみ、空を見つめて時を過ごす姿は、まるで水をたたえて鏡面のように空を映す棚田の輝きそのものようにみ

える。泰澄大師の話の中で、雷神は山の神と親しい仲間だと自ら述べていたが、グリフィスの物語では、白山をいたたく棚田という場を得て、山と水と、そして地上に降り立つ雷神の子の一体性が、効果的に表現されているのではないか。

ところで、グリフィスは、白山を拝する越前の山あいの棚田を描いたが、福井では若狭や越前海岸の、海に面した棚田が知られる。⁽²³⁾ 柳田国男も明治四十二年に福井を旅して、「隧道すいどうを出ると突然に海岸の山の上なり。見おろす限り渚の村まで、はるかに数百個の稲田あり、更科や田毎の月は物の数ならず。水皆白く光り海うつくし。」⁽²⁴⁾（「北國紀行」）と述べた。

ところで、棚田の景観を農民労働の記念碑として、「まさに日本のピラミッド」だと評した米国の地理学者の言葉を紹介したのは、農業経済学者の東畑精一（「米」、一九四〇年⁽²⁵⁾）である。さらに、「耕して天に至る。貧なるかな。」あるいは、「耕して天に至る。ああ勤勉なるかな、貧なるかな」という表現もよく聞く。この言葉は、瀬戸内海の宇和島の棚田を見た李鴻章が言ったとも、孫文が言ったともいうが、ただし世に広めたのは、それぞれ司馬遼太郎（『街道をゆく』9 信州佐久みち、湯のみち）一九七九年）や宮脇俊三（『夢の山岳鉄道』一九九三年）などの紀行文である。司馬遼太郎は、この「清の貴人」は日本の「狭い国土の極度の利用に貧をみた」のだという。引用の典故が示されていないので確認できないが、発言者も引用者も、棚田に労働の苦しさで果てなき勤勉を思っただろう。⁽²⁶⁾ 東南アジアの広大なスケールの棚田が世界遺産に登録されたのも、やはり一種の「ピラミッド」と評価されたからに違いない。

自然と人為の融合ともいうべき景観としての棚田の美が、傾斜地における人の営みの切なさや尊さのあらわれ

にあることは確かだろう。だが、山の急斜面に作られる他の農作物、例えばワイン畑、アイルランドの海藻の畑も厳しい自然環境のなかで、厳しい労働の賜物としての景観を形成している。棚田がそれらと異なるのは、夏へと向かう季節に水をたたえて、空を、天を映すところにあるのではないか。

グリフィスの「雷の子」は、その意味で、棚田の本質をとらえた物語だといえるだろう。そして、水を介した天と人との呼応は、山の斜面全体をおおう広大な棚田ではなく、また海辺の棚田でもなく、棚田を見上げる視線の向こうに雪の峰がある、山あいの谷に作られた、一筋の細い土地だからこそ、より鮮明な画像として、読者の脳裏に刻まれるのではないか。

そして物語の最後をしめる、老夫婦のその後と死の話は、単なる後日談のようであり、自然と人間の関係の根幹にかかわるグリフィスの物語を完成させる、重要な役を担っている。

さきに「雷の子」の物語は、昔話の形で、申し子の物語だといったが、ここにはまた、人間と人間ではない存在の関係が語られているという点で、いわゆる「異類婚姻譚」にも通じる要素がある。たとえば羽衣伝説、鶴女房、そしてハーンの「雪女」など、こういう物語では、人間と異類（天女、鶴、雪の精霊）はしばらく幸せな関係で結ばれているが、最後は何かがきっかけで、関係が破たんする。たいていは人間側が約束を破り、タブーを犯して、異類は去っていき、人間はとり残される。両者は、最後には必ず別れるわけで、ある意味、人間と異類との関係のひとつの本質的な側面を表す昔話の形といえる。

「雷の子」も、最後には白い龍の姿に戻って空に帰っていく。タブーなどの設定はないが、成人になり、時満ちて、農夫に応える役目を終えて、雷太郎が本来帰属する神々の世界に戻る。雷太郎の白龍が、名残を惜しむか

のように、しばし老夫婦の頭上を旋回してから、青い夏の空を、天空の城のような白い入道雲に向かって飛んでいく場面が美しい。白龍が昇っていき、しかも小さな龍がどんどん大きく遅しくなって、最後には、空の雲と一つに溶け入る。この上昇するクレッシェンドの動きが、冒頭の場面の、白山の白い峰の高みから水が流れて、地上の田畑に下降してくる動きに対応していることは、明らかだろう。かくして、天から地上へ、地上から再び天へと、円環をなして「雷の子」の中核の物語は終わる。

ここで作品が終わっても、それなりの余韻があつて、いいのかもしれない。ところが、グリフィスは、この円環に、人間側のその後の話を添えるのである。

老夫婦は、穏やかに過ごし、亡くなって、火葬に付される。白い灰になって、白い骨壺に収められ、墓石には、龍の文様が刻まれる。骨壺の白さ、龍の文様も暗示的だが、老夫婦は、火葬ののち、一筋の白い煙となって、空にたち上っていった。まるで雷太郎の後を追って、棚田を登り、白山の白い頂きに溶けいったかのように想像される。つまりグリフィスの物語では、人間も最後は龍となって、神々のもとに引き上げられ、一体化するといえるのである。

こうして、グリフィスの「雷の子」を読み終えると、色彩が印象的な作品だと思う。白という色が際立っているのである。白山の雪の頂、水のきらめき、夏の入道雲に白い龍。そして最後の火葬の煙、遺灰、白い骨壺、龍を形どった白い墓石。この白が、濃い緑の木々と、青い夏空のなかに浮かび上がる。そして、棚田と龍と火葬の煙の、立ち上る動きが、山の頂上から水が流れ落ちる下降の動きと相和していて、山の緑のなかで、天と地が照

応じているのである。いわば棚田が上昇と下降を一本の白い水の流れに集約させる装置となっているともいえよう。

ここで、本論のはじめに引用した、グリフィスによる神社の描写が想起される。山深き木立の中に、白木の社、神主の白い衣、白い御幣が浮かびあがり、人間と神々が親和する空間を描いた。グリフィスの民話、「雷の子」の色彩感覚もまた、グリフィスが捉えた、そのような神社空間のイメージと響きあっているのではないか。

グリフィスの日記には、寺や神社の他に、たまたま火葬場を訪ねたおり（明治五年四月二十一日）の記述もある。山辺を散歩した晩秋のある日（同十一月二十五日）には葬列と出会い、火葬の煙が空に立ち上るさまを見て、その夜、物思いにふけたという。⁽²⁷⁾

グリフィスは、宣教師だった。だからこそ、日本の宗教的状况に関心をもち、人々の信仰のありかたを見極めようとしていたと考えられる。とすれば、「雷の子」という物語の、さらなる一面も見えてこよう。

つまりグリフィスの「雷の子」にあつては、元興寺や泰澄法師の「雷の子」説話とは、仏教と雷神の関係が異なるということが指摘できるのである。前述したように、これらの説話では雷神は仏教のもとに服する。古来の山水が仏教のもとにとりこまれる。だがグリフィスの話では、寺の墓石は雷神である龍の姿と化し、寺で火葬された農夫は、一条の白煙となつて、白山の白い峰に引き上げられ、その頂きに消え入る。仏教の方が山と雷神のなかに抱かれ、包み込まれているのではないか。

物語冒頭、遠くに映し出された白山の白い峰が、最後に積み重なる入道雲と重ねられて大きくクローズアップされる。山は、雷の子も、白龍も、人間も、そして、仏教という異宗教をも取り込んで、より奥深く、一層大き

く、だが身近なりアリティを得て、終わるのである。人間を超越した高峰の荘嚴な雪の山肌が、ここに、人間存在を經由した温もりに映えて、読者の心には、その柔和な色の輝きが残る。

グリフィスの「雷の子」は日本の雷神信仰の物語の系譜につらなる。だが、そこに描かれているのは、一人の外国人が明治日本にみいだした、人と自然の照応の物語でもある。

「雷の子」をはじめ、「the spirit of Old Japan」。「日本の昔ながらの精神」を伝えるものとしての日本民話集を、グリフィスは数十年にわたって、人生の最後まで刊行しつづけた。一方、一九〇八年、一九二三年と版を改めるにつれ、日本は、若きグリフィスが来日したおりには想像もつかぬほどの変化を遂げていく。来日時、アジアのなかで植民地状態ではなかったのは、日本とタイのみであった。その日本は近代化をとげ、日清、日露戦争を勝ち抜いていた。賞賛と反感と警戒にさらされつつ、やがて苦難の時代が遠くにはの見える。このような文脈のなかで、グリフィスは日本の民話集を繰り返し刊行したのである。それは失われつつあるものをいとおしむと同時に、そこに価値を見出し、世界に向けて提示することでもあったはずだ。だからこそ興味深いと私は思う。

一九〇八年の民話集以降の版において、新たに加えられた「黄金の漆の贈り物」がどういいう物語なのか、それは稿を改めることとする。

【参考文献】

・ Baroness Orczy, *Old Hungarian Fairy Tales*, Dean & Son, Ltd, London, 1895.

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

- ・ William Elliot Griffis, *Japanese Fairy World: Stories from the Wonderlore of Japan*, 1880, N. Y., James H. Bartlye.
- ・ Ferdinand Adalbert Junker Von Langege, *Japanische Thee-Geschichten: Fu-so-chu-wa*, 1884, Wien.
- ・ ヨンケル『外国人のみたお伽ばなし—京のお雇い医師ヨンケルの『扶桑茶話』』奥沢康正訳、思文閣出版、一九三三年。
- ・ David Brauns, *Japanische Märchen und Sagen*, Leipzig, Verlag von Wilhelm Friedrich, 1885.
- ・ 山下英一『グリフィスと福井』福井県郷土誌懇談会へ福井県郷土新書5、一九七九年。
- ・ 『グリフィスと福井 増補改訂版』エクシート、二〇一三年。
- ・ 『グリフィスと日本 明治の精神を問いつづけた米国人ジャバノロジスト』近代文芸社、一九九五年。
- ・ 『グリフィス福井書簡 William Elliot Griffis』能登印刷出版部、二〇〇九年。
- ・ Algernon Bertram Freeman-Mitford, *Tales of Old Japan*, 1871.
- ・ 平泉澄校訂『泰澄和尚伝記』白山神社、一九五三年。
- ・ 司馬遼太郎『街道をゆく18・越前の諸道』朝日文庫、一九八七年。
- ・ 佐々木喜善『偽雷墮落譚』『旅と伝説』五卷二二号通巻六〇号、三元社、一九三三年九月、五九—六六頁。
- ・ 『搜神記』干宝著・竹田晃訳（東洋文庫10）、平凡社、一九六四年、一三—一九頁。
- ・ アン・ヘリング『児童図書翻訳事始—他の言語へのひろがり』『日本の子どもの本歴史展—一七世紀から一九世紀の絵入り本を中心に』東京都庭園美術館 一九八六年七一—七五頁。
- ・ 『日本霊異記』多田一臣校註、ちくま学芸文庫
- ・ 黒沢幸三『霊異記の道場法師承説話について』『同志社国文学（七）』、一九七九年二月、同志社大学国文学会。
- ・ 黒沢幸三『日本古代の伝承文学の研究』塙書房、一九八一年。
- ・ 柳田国男『雷神信仰の変遷』『妹の力』（定本柳田国男集）第九卷、筑摩書房一九六六年。

・三浦佑之『日本靈異記の世界』角川選書、角川学芸出版、平成二十二年。

・河野貴美子『日本靈異記と中国の伝承』勉誠出版、一九九六年。

・『奈良県史13 奈良県史編集委員会編 民俗（下）』一三卷（民俗下続・大和の伝承文化）／

岩井宏実、鏡味明克編、名著出版、一九八八年十一月、一三三―一四四頁。

・田中正日子「古代における自然の開発と信仰について」『第一経大論集』一三（二・三）、第一経済大学経済研究会一九八三年。

・村上健司編著『妖怪事典』毎日新聞社、二〇〇〇年、一八九頁。

・『日本昔話通観』全三十一巻、稲田浩二・小沢俊夫責任編集、同朋舎出版、一九七七年。一九八〇年。

・ラフカディオ・ハーン「螢」（小泉八雲名作選集『明治日本の面影』平川祐弘編訳、講談社学術文庫、一九九〇年）。

・杉原丈夫編『越前若狭の伝説』、安田書店、一九七六年。

・杉原丈夫、石崎直義共編『若狭・越前の民話』第一集（日本の民話：四四）、未来社、一九八〇年。

同、第二集（日本の民話：七三）、未来社、一九七八年。

・東畑精一『米』、中央公論社、一九四〇年。

〔注〕

(1) 牧野陽子「グリフィスからハーンへ——In the Heart of Japan」『経済研究』二〇七号、成城大学経済学部、平成二七年二月

(2) グリフィス『明治日本体験記』（『皇国』）山下英一訳、東洋文庫、一〇五頁。

(3) A. B. Mitford, *Tales of Old Japan*, Charles E. Tuttle Co., 1966, p. 15

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

なお、ラフカディオ・ハーンも、『知られぬ日本の面影』の序文でミットフォードのこの言葉を引いて、同じ考えで、日本の知られざる精神風土の解明をめざしたと述べている。

(4) 目次は次の通り

William Griffiths, *Japanese Fairy World*, London, Tribner & Co., 1887

- I. The Meeting of the Star Lovers. (織姫と彦星)
- II. The Travels of Two Frogs. (京の蛙 大阪の蛙)
- III. The Child of the Thunder. (雷の子)
- IV. The Tongue-cut Sparrow. (舌切雀)
- V. The Fire-fly's Lovers. (螢の求婚者)
- VI. The Battle of the Ape and the Crab. (猿蟹合戦)
- VII. The Wonderful Tea-Kettle. (文福茶釜)
- VIII. Peach-Prince and the Treasure Island. (桃太郎)
- IX. The Fox and the Badger. (狐と狸 野干の手柄)
- X. The Seven Patrons of Happiness. (七福神)
- XI. Daikoku and the Oni. 大黒様と鬼
- XII. Benkei and the Bell. (弁慶の引きすり鐘)
- XIII. Little Silver's Dream of the Shoji. (お銀さんの見た狸々の夢)
- XIV. The Tengus, or the Elves with Long Noses. (天狗)
- XV. Kintaro, the Wild Baby. (金太郎)

- XVII. Jiraiya, or the Magic Frog. (自来也、蝦蟇の妖術)
 XVII. How the Jelly-Fish Lost its Shell. (猿の生き肝)
 XXVIII. Lord Cuttle-Fish Gives a Concert. (イカ卿が音楽会を開く)
 XIX. Yornasa, the Brave Archer. (源頼政 勇敢な射手)
 XX. Wananabe cuts off the Oni's Arm. (渡辺綱の鬼退治)
 XXI. Wananabe Kills the Great Spider. (渡辺綱と土蜘蛛)
 XXII. Rakko and the Shi Ten Doji. (頼光と酒吞童子)
 XXIII. The Sazaye and the Tai. (サザエとタイ)
 XXIV. Smells and Jingles. (鯁の香、銭の音)
 XXV. The Lake of the Lute and the Matchless Mountain. (琵琶湖と富士山)
 XXVI. The Earthquake Fish. (地震と魚)
 XXVII. The Dream Story of Gofjino. (鯉の滝登り)
 XXVIII. The Procession of Lord Long-Legs. (脚長殿の大名行列)
 VXXIX. Kiyohime, or the Power of Love. (安珍清姫)
 XXX*. The Fisherman and the Moon-Maiden. (羽衣伝説)
 XXXI. The Tide Jewels. (干珠満珠)
 XXXII. Kai Riu O, or the Dragon King of the World Under the Sea. (竜宮の王)
 XXXIII. The Creation of Heaven and Earth. (天地創造)
 XXXIV. How the Sun Goddess was Enticed out of her Cave (天の岩戸)
 ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

ウイリアム・グリフィスの日本民話集について

(5) 改めて記すまでもないことだが、天岩戸の話については、冬至神話以外にも、日食を表すという解釈、火山の噴火によって火山灰が空を覆い、真つ暗になる現象を表すという説などがある。

(6) グリフィスの『日本の御伽の世界』(一八八〇年)は日本の昔話ばかりを集めた本の草分けとして版を重ね、後出の日本民話集の種本となった。グリフィスが創作だと断っている「蛭姫の結婚」「雷の子」さえも日本の民話、「Princess Fire-fly」「Rai-taro, the son of Thunder-God」(エドワード・Frank Rinder, *Old-World Japan: Legends of the Land of the Gods*, London: George Allen, 1895)に入っていることをアン・ヘリングが指摘している。(児童図書翻訳事始―他の言語へのひろがり)『日本の子どもの本歴史展 ―十七世紀から十九世紀の絵入り本を中心に』東京都庭園美術館 昭和六一年、七一―七五頁)

その他の、「雷の子」の収録例としては、次がある。

“The Good Thunder”, Grace James, *Green Willow and Other Japanese Fairy Tales*, London: Macmillan and Company, 1912. ちなみにこの表題作は、ラフカディオ・ハーンのもの「青柳物語」を用いている。

(7) *Japanese Fairy World*, London: Tribner & Co., 1887, p. 37

(8) 「蛭姫の結婚」は、後世の他の物語集に何度も再録された作品だが、再掲載されたときは、この前置きの部分は省略されている。

(9) *Ibid.*, p. 20-29

(10) 柳田国男「天の南瓜」『昔話覚書』定本柳田国男集第六巻、四二二頁。

(11) たとえば、柳田国男「目一つ五郎考」(『民族』、民族発行所、昭和二年十一月号)には、『落穂餘談』(巻五)から引用して、次のような伝承を紹介している。庄屋が山に入って猟をした時、水溜りの端に七、八歳の小児が五、六人おり、庄屋を見てリュウノヒゲの中に隠れた。狙い撃ったが当たらず、家に帰ると女房に物が憑いて狂い死んだ。小

児は雷神だった。柳田は、この豊後の伝承に、「一眼一足の怪」(『妖怪談義』、定本柳田国男集四、四一五頁)その他でも言及している。

(12) 『雷神信仰の変遷』(原題「若宮部と雷神」『民族』、昭和二年五月号)『妹の力』創元社、昭和十五年所収。

『定本柳田国男集』第九卷、筑摩書房。

(13) 『定本柳田国男集』第九卷、筑摩書房、六四頁。

(14) 『日本靈異記』多田一臣校註、ちくま学芸文庫、四四―四六頁。

(15) 『搜神記』干宝著、竹田晃訳(『東洋文庫』10)、平凡社、一九六四年、二三―九頁。

(16) 河野喜美子『日本靈異記と中国の伝承』、勉誠出版、一九九六年、一六頁。

(17) 柳田国男、同前、六四頁。

(18) ちなみに、「雷を捉ふる縁」とされた『靈異記』上巻一話は雄略天皇の命で、小子部栖軽が「鳴る神(雷)を請け奉る」、つまり、雷さまに呼びかけて、落ちてもらい、天皇は、礼を尽くして、落ちたところに戻すという話なのだ。が、栖軽も天皇も雷に対して敬語を使い、落ちた雷を輿に入れて運び、幣帛を奉り、古来の雷神畏怖の信仰を示している。同じエピソードを記した『日本書記』の「雄略記」では、天皇は命令を発する権力者として上位に立ち、雷を捕まえる栖軽にも、雷を敬う態度がないとして、『靈異記』と『日本書記』の文献としての違いを黒沢幸三が「靈異記の道場法師系説話について」のなかで指摘している。

(19) 天武天皇四年(六七六年)に始まった風神祭は、四季の運行や風雨の調和、その年の豊年を祈る祭りとして制定され、現在でも六月末から行われる七日七夜の風鎮祭に受け継がれている。

(20) 奈良県生駒郡三郷町立野 竜田大社風鎮祭『奈良県史13 奈良県史編集委員会編 民俗(下)』一三卷(続・大和の伝承文化)／岩井宏実、鏡味明克編、名著出版、一九八八年、一四一頁。

ウィリアム・グリフィスの日本民話集について

ウイリアム・グリフィスの日本民話集について

- (21) 『今昔物語集三』(新日本古典文学大系35) 池上海一校注、岩波書店、一九九三年、一〇〇頁。
- (22) 黒沢幸三「靈異記の道場法師系説話について」『同志社国文学』(七)、一九七二年二月、同志社大学国文学会。
- (23) 若狭の日引の棚田(高浜町)と、越前海岸の梨子ヶ平なしかへらの棚田が「日本の棚田百選」に選定されている。
- (24) 「北國紀行」『柳田国男全集』第三卷、一五三頁。
- (25) 東畑精一『米』、中央公論社、一九四〇年、一三四頁。
- (26) 司馬遼太郎『街道をゆく9 信州佐久みち、湯のみち』、朝日文庫、十一頁。
同 『街道をゆく25 中国 閩のみち』、朝日文庫、四二頁。
- 宮脇俊三『夢の山岳鉄道』、日本交通公社、一五四頁。
- なお面白いことに、現在、キャッチコピーのように流布しているのは、前半の「耕して天に至る」だけであり、後半の「貧なるかな」は省略される。信州更級の棚田を舞台に歌われてきた「田毎の月」にも通じる、棚田の景観に対する日本人の感性のありかたが分かるのではないか。
- (27) 山下英一『グリフィスと福井』、二二七頁、一九七頁。